

進取の気性に富み、自由を重んじたフランスの作曲家ドビュッシー。自分の表現したい音楽は伝統から逸脱したところにあると、かなり早い段階で意識したようだ。手紙などで「新しい形式を生み出さねばなりません」「リズムは小節のなかに収まらない」と綴り、32歳で初演された《牧神の午後への前奏曲》でいよいよ自らの進

む方向を決定付けた。印象派と呼ばれ、後世に大きな影響を残した。

印象派

もとは、19世紀後半のフランスで生じた、自然の光やきらめきといった印象を重んじて、明確な輪郭線を排した絵画を指した用語。音楽では、形式にこだわらず、情景を描写するような色彩感を重要視した作風を指す。ドビュッシーのゆらめく独特の響きは、従来の和声に頼らない、さまざまな手法・技法によって成り立っている。

C

2024

JUNE

[第2014回]



Claude Debussy (1862-1918)

クロード・ドビュッシー

ゆらめく色彩、美しい情景



月の光とセイレーンが入り込んだ
ホイッスラーの絵画「青と銀のノクターン」を眺めるドビュッシー
イラストレーション: ©IKE